

1938年広島県尾道市生まれ。1960年代からテレビCMの制作に携わり、2,000本以上もの作品を手掛ける。「HOUSE / ハウス」(1977年)で劇場映画にデビュー。故郷で撮影された『転校生』(1982年)、『時をかける少女』(1983年)、『さびしんぼう』(1985年)は「尾道三部作」と称され、そのリメイク版・新尾道三部作も含めて、多くの映画ファンたちに愛され続けている。また、第21回日本文芸大賞・特別賞を受賞した『日日世は好日』など、著書も多数発表している。2004年紫綬褒章、2009年旭日小綬章を受章。最新作に北海道芦別市を舞台にしたふるさと映画『野のななのか』(2014年公開予定)。

魅惑のシネマ

映画との出会い、監督の道へ進むことになったきっかけを教えてください。

実は映画館に通い出す前に映画をつくることを覚えていた。

生家が代々続く医者で、当時のまじい医者というのは、文化の発信も担っていたようなところがあつたから、納戸の中には海外から港に届いた珍しいものをはじめ、いろんなものがあつた。そのなかで「わつだうだいしやしんき」(「活動大写真機」と書かれた、今でいう映写機があつた。まだ幼かった僕は、尾道の小高い丘から見える蒸気機関車が大のお気に入り。それを蒸気機関車のおもちゃだと勘違いした。そしてフィルムが石炭だと思つて、それを切つてレンズで光を集めて燃やしてみたりしていたが、どうやら仕様が違つたことに気づいて、次はフィルムを走らせるワラックをカタコンカタコンとまわしてみた。すると絵が動き出したから、これは何か汽車の旅行風景を楽しむものかしらと思つたりして遊んでいた。とにかくそのおもちゃが大好きで、フィルムを体に巻きつけてお風呂に入つたりしていると、ある時フィルムの絵がはがれてしまった。それでそのフィルムの上に絵を描いたり、父親のライカのカメラを使って連続写真を撮つて、そのフィルムをカタカタまわして遊んだのが最初の自作映画かな。

子供時代はやはりいろんな映画をご覧になったんですか。

小学生になって、まだ活動小屋とも呼ばれていた映画館に頻りに通つた。そのころ尾道には9つの映画館があつて、ひとつの映画館では週に3本くらいしかあつて、それを全部観ていたから、高校卒業して上京するまで、多い時は週に30本くらい観ていた。



その活動小屋で、大人が夢中になっている姿を見て、映画とはいくつになつても楽しい遊び、それはなんでもいいものなんだと思つていた。

その頃観た映画と現在の映画とは、変化したこと多いですね。

そもそも映画は、科学文明の産物。写真が動いて映画に、サイレント映画から音がでるトーキー映画へ、モノクロームからカラー、フィルムからデジタル、そしてCG、二次元から三次元へと、技術・文明の発達とともに映画も変化してきた。映画はそもそも科学文明の産物なんだから、価値の是非にかかわらず、科学が発達すれば、どんどん変化する。

ただ、僕など古い映画ファンが憂えるのは、技術の進歩に反比例する形で、文化や想像力は退化しているかもしれないということ。

デジタルはいろんなことを簡単に表現できるようになったけど、特にアクションがめつさりつまなくなつた。以前アクションのように本当に体を張つて演じたり、セットをリアルに作りこむようなことがなくなつて、観る方も頭のどこかでCGだつていうのがわかるから、本当の緊張感、ハラハラドキドキがめつさり減つた気がする。感心はするけど感動がない。脳科学者茂木健一郎さんが、「脳がおいつかないと感動する」といつていたけど、デジタル技術の発達で、これまで難しかったいろんな情報としての映像を容易につくることができるようになって、とても分かりやすくなつたけど、映画自身の想像力や物語性も失つて、そこに大きな矛盾や疑問を抱えるようになった。

そうやって映像技術が変化していく中、監督は映画をつくり続けていらつしやいますか。

いろんな難題に直面している映画だけど、一方でいろんな可能性を秘めている。「この空の花」長岡花火物語を今年の夏、広島、長崎での記念式典行事の一環として上映したが、それは映画の舞台となった長岡市長が直々に各都市に話を投げかけ実現したものだ。また、この映画を上映したマーシャル諸島では、水爆実験の爆弾

の愛称がそれだつた。それから禁句になつていた「ブラボー」という言葉が、この映画の上映後、称賛の言葉として人々に受け入れられた。

映画が人と人をつなぎ都市を結び、哀しい過去、タブーを乗り越えていくきっかけになつていく。



その監督の最新作「この空の花」長岡花火物語」を観た人からは、監督のこれまでにない新境地の内容に多くの驚きと感動の声を聞きました。

この映画を撮る前、7歳の時に倒れて一時心肺停止になつたが一命を取り留めた。生かされたと思つている。これを境に、これまで「何を描くか」よりも「どう描くか」というエンタテインメントを軸に撮り続けた映画だつたが、描かなかつたことがあまりにも多すぎる。それを伝えたいと強く思つた。それで、何を描き伝えてゆかか、という芸術の伝達能力に主眼を置いた映画をつくつた。そういう意味では、娯楽としてのエンタスターがきちんと話まわつていくかという自分なりの疑問はあつたが、そこには思わぬ反響があつた。

伝えたい事、描きたい事がまだまだある。映画の可能性を大いに利用して、命つきるまで映画を撮り続けたいと思つている。

実は唐津で映画をつくる話があつたとか。

唐津は、縁があつてこれまで何度か訪れています。劇場用の映画としての第一作「HOUSE」の前に、唐津を舞台にした映画を撮る計画があつた。檀雄の「花籃」はながたみ」という小説を映画化する企画で、その舞台が

唐津だつた。しかし原作者の檀さんが亡くなり、同時に東宝で「HOUSE」を撮ることになつて、この映画の構想は、実現を見ぬままそのまゝ30年以上あためていいます。

是非実現を願うばかりです！最後に唐津シネマの会は、映画館がなくなつたまちでもう一度映画を、という想いで活動をしています。唐津シネマの会について一言お願いします。

映画を観ることは、そこにある情報からいろんな想像をめぐらせ、知らない人や社会、文化を理解する人生の学校のようなもの。

映画に感動するということは、そこに目に見えない心を感じるからです。そこには、人がどう許し合うのか、仲良くするの、学校教育では教えてくれない、いろんな社会や人の想像力、思いやりのようなものが育つ土壌がある。また同じ作品でも、その場所、人によつて全然見え方が違ふ。例えば女性なのか老人なのか性別や世代で違つたり、その日が楽しい日だったり、孤独な日だったり、作り手の意図にかかわらず、観る人によつて全く違う映画になつていく。そういう意味で、観る人が映画をつくつていくのだと言ってもいい。そこに映画の大衆文化を所与や総合芸術の役割がある。いろんな背景の人が一緒になつて映画を観る。そこから、それそれいろんなことを感じる。そのこと自体、これからの時代として意味のあることです。

文化でまちおこしをしようというのは決して間違つていない。今していることを信じて頑張ってください。

